

# 公民館で大学で 楽しみ方伝える

## もり立てに「一役

昨年の10月1日。松本市南東部に広がる住宅地・寿台地区の酒屋3軒に、黄色いラベルの見慣れない一升瓶が並んだ。「純米酒 寿一番星」。

住民の吉村結城子さん(31)は夕方、そわそわした表情で酒屋を一軒ずつ回り、この日店頭に置かれたすべてが売れたことを聞いて感激した。

の人でつくる「新党日本酒」のメンバーが携わったオリジナルの酒だ。酒米・美山錦を田植えから収穫まで手掛け、市内の酒蔵に仕込んでもらった。「日本酒の日」の10月1日に合わせて販売、650本分は1カ月で完売した。

「住民がかかわった愛着のある酒。日本酒を普段飲まない人も『珍しいね』と関心を示し、口にしたり、周りの人に薦めたりしてくれた。来年は別の米で挑戦したい」と吉村さんは意気込む。

大学卒業後、東京で働きの

から司法試験の勉強をしていたが、体調を崩して松本に戻った。

「体調の良いとき、たまたま飲んだ日本酒がおいしくて開眼しました」。以来、「きき酒師」の資格を取り、08年には自ら講師になって地元で日本酒の講座を立ち上げた。新党日本酒も結成し、党首に就任した。ともに幅広い世代が参加する。

最近、男女の出会いパーティーなどに呼ばれるようになった。日本酒の文化や魅力を参加者に説明して「乾杯」。

日本酒に関するクイズや利き酒で場を盛り上げる。「職場のお酌合戦」などで日本酒がイヤになった人が多く、パーティー後に「こんなにおいしいとは知らなかった」と言ってもらえるのが喜びだ。

「つくり手の努力や思いを私たちが受け手が理解しないといけない。私は日本酒への理解を売る、そんな役目を果たしたい。それが、つくり手への刺激にもなると思う」



吉村結城子さん